

2017/10/01

「後戻りできない」

■救いは神による

「もし私たちが、キリストにつき合わされて、キリストの死と同じようになっているのなら、必ずキリストの復活とも同じようになるからです。」(ローマ 6:5)

救いとは、キリストにつき合わされることで、「接木」とも訳されます。本来神と共に生きていた人間が、罪によって神とのつながりを失い、再びキリストにつき合わされてその関係を回復することが救いです。そして、キリストにつき合わされた者は、「必ず」天国に行けます。救いが取り消されるような例外はないと聖書は教えています。

ところが、多くのクリスチャンが、自分は本当に救われているのか、本当に天国に行けるのだろうかと不安を抱くものです。それは、救いは魂で行われるものであるため、自分で意識することができないからです。そこで、聖書は、救いを確認する手段を次のように教えています。

「ですから、私は、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ。」と言わず、また、聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です。」と言うことはできません。」(I コリント 12:3)

もし、聖霊とつき合わされていないければ、「イエスは主だ」と告白することはできません。あなたが「イエスは神だ」と告白したことがあるならば、それは、すでにイエス・キリストに接木されているのです。

ここで大切なことは、告白できたら救われるのではなく、救われたら告白できると教えられているということです。つまり、まず神によって救いを受け、その結果、イエス・キリストを告白できるようになるということなのです。

人は、神とのつながりを失い、死の不安、罪が罰せられる不安、自分がやがて消えてなくなる不安等を抱くようになりました。その心のドアを、神様がノックし続けることで、不安があおられ、ついにドアを開いて、差し出されたその手にしがみつきました。これが、救いです。ただし、これは私たちが意識できない潜在意識の中でなされたことです。人間は、自分でも気づかないうちに、潜在意識の中で様々な選択をしているのです。

ですから、救いは、人間の力によるものではなく、聖霊によるものです。神様が一方的に、私たちの心に働きかけてくださり、自分の意識を超えた潜在意識によって神の御手をつかんだ結果、人は救われます。ただし、この段階では、人に救われた自覚はありません。聖霊によって救われた結果、御言葉を通してイエス・キリストを知った時、イエスは主であると告白できるのです。

「もし、だれかが神の神殿をこわすなら、神がその人を滅ぼされます。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたがその神殿です。」(I コリント 3:17)

神殿とは、神の住まいです。自分の中に神が住まわれたということが救いであり、このようにしてイエス様とつながっているから、イエス・キリストを知ることができるようになるのです。

■神とのつながりを断ち切ることはできない

「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」(ヨハネ 10:28)

イエス様は、一度救われた者から永遠のいのちを取り上げたりすることは決してないと言われますが、救いが潜在意識の中で行われた作業であるため、多くの方は、自分は本当に救われたのだろうかと不安を抱きます。神がつないだ手を離したり、接ぎ木された枝が再び折られたり、イエス様が私たちの中から出て行くようなことはないと言えるのはなぜなのでしょう。

救いとは、神によって永遠のいのちが与えられることですが、聖書は、イエス・キリストご自身を「永遠のいのち」と呼んでいます(Ⅰヨハネ 1章)。人が「永遠のいのち」を得られるのは、永遠なるイエス・キリストに接ぎ木されるためです。幹が永遠であるため、その木に接ぎ木された枝は滅びないのです。救われた人の魂は、すでにキリストと一体になっていますから、キリストが滅びない方であるがゆえに滅びることはありません。神の救いは完全に絶対のものなのです。

それは、救いが人の働きによるものではなく、神の自由な意志によるものだからです。神様は、ご自分の意志で人間に御手を差し伸べ、その手をつかんだ人をお救いになります。神様がご自分の意志で、「私は、救った者を決して離さない」と言っておられるのですから、離すことはありません。このことをパウロは次のように述べています。

「神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしてくださるのです。」
(ローマ 8:33-34)

「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」
(ローマ 8:38-39)

神に選ばれた人々とは、神が救った人のことです。神が引き上げ、義とした人を、誰が死人に戻せるというのでしょうか。一度救われた人を、誰も神から引き離して死人に戻すことはできないし、誰もその人から永遠のいのちを奪うことはできないと、聖書は断言しています。神様が私たちを離さない以上、誰もそのつながりを断ち切ることはできないのです。

「兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」（ピリピ 3:13-14）

救われた人は、もう後戻りはできないのです。前に進む道、すなわち、神に近づく道しか残されていないのですから、もっとイエス様と親しくなり、さらに主を愛し、信頼することを目指すしかないのです。

■イエス様に近づく道は後ろに進めない

以上のように、イエス様ご自身が、「神が救った者から永遠のいのちを奪うことは、誰もできない」と言い、パウロも「誰も神の愛から私たちを引き離すことはできない」と断言しています。では、次の御言葉は、どのように理解すれば良いのでしょうか。

「一度光を受けて天からの賜物の味を知り、聖霊にあずかる者となり、神のすばらしいことばと、後にやがて来る世の力とを味わったうえで、しかも墮落してしまうならば、そういう人々をもう一度悔い改めに立ち返らせることはできません。彼らは、自分で神の子をもう一度十字架にかけて、恥辱を与える人たちだからです。」（ヘブル 6:4-6）

聖書を理解するうえで大切なことは、第一に、イエス・キリストが何とっておられるか、という点です。さらに、弟子たちがイエス様の言葉をどのように解釈しているかを読み取ります。聖書の一部だけを取り上げてしまうと、どのような解釈も可能になってしまいますから、聖書全体の文脈を通して理解することが非常に重要です。

ヘブル人への手紙は、ローマ人への手紙と同様、パウロが書いた書簡とされています。同じ著者が、いっぽうで「一度救われた者は神から引き離されることはない」と教え、もういっぽうで「救われてから墮落した者を再び悔い改めさせることはできない」と教えているのは、いったいどういう意味なのでしょう。

この箇所は、ギリシャ語の理解が非常に難しい箇所であり、いくつかの別訳が可能です。「墮落」と訳されている「パラピプター」という言葉は、罪深い生活という意味ではなく、歩いてきた道から落ちこちるイメージの言葉です。つまり、救われた人が神との結びつきを失って、死人に戻るイメージです。しかし、そんなことは決してあり得ないのは、前述したとおりです。

ということは、この箇所は、「ありえない話だが」という前提がつく内容だと理解すべきなのです。というのも、ヘブル人への手紙の全文を読めばわかることですが、この手紙のテーマは、「ですから、私たちは、キリストについての初歩の教えをあとにして、成熟を目ざして進もうではありませんか」（ヘブル 6:1）に集約されています。つまり、6章4節からの言葉は、「救われたあなたがたが、もう一度神様から離れて罪の生活を送ることなど不可能なのだから、前に進むしかないでしょう。」と、励ましている内容なのです。前に進むとは、信仰を使ってイエス・キリストを深く知り、信頼できるようになって、平安を得るということです。

「こういうわけで、神の安息にはいるための約束はまだ残っているのですから、あなたがたのうちのひとりでも、万が一にもこれにはいれないようなことのないように、私たちは恐れる心を持つようではありませんか。」（ヘブル 4:1）

「神の安息」とは、平安です。救いとは、イエス様につながる道をかけてもらうことであり、一度この道の上に置かれたら、戻ることも落ちることもできません。前に進むしかない道を歩いていくと、イエス様に少しずつ近づいていきます。こうして、ある時点で、救い主とはイエス様だと知ることができるようになり、さらに前に進むことで、イエス様が近い存在になり、信頼が増し加わります。イエス様との距離が縮まれば縮まるほど、人は平安になります。

聖書が語る福音には、二段階あり、その第一段階が救いです。これは、イエス様につながる橋がかかることです。そして、この道を進んでイエス様に近づき、平安が育つ第二段階があるのです。この時、キリストに向かずに、見える安心に進むことが罪です。この罪を不信仰と言います。ですから、前に進むこと、すなわち神を信頼しようとするを罪と戦うと言うのです。

「それゆえ、彼らが安息にはいれなかったのは、不信仰のためであったことがわかります。」
（ヘブル 3:19）

不信仰と戦ってキリストに近づくなれば、平安の義の実を結びます。神が教える福音は、ただ救って終わりではなく、平安の義の実を結ぶものです。この約束から誰ひとり漏れることがないようにというのが、ヘブル人への手紙のテーマです。エジプトを脱出したイスラエル人は、せっかく救われたにも関わらず、罪と戦わなかったため、約束されたカナンの地に入れませんでした。あなたがたがそのようなことにならないように、私たちは決して後戻りなどできないのだから、安息を目指して不信仰と戦いなさいという意図で、この手紙は書かれています。

確かに、クリスチャンになっても教会に来なくなる人はいます。イエス様を信頼できなくなる人もいます。自分の不信仰や不道徳を見て、こんな自分が救われたと言えるのかと不安になる人もいます。しかし、救いは神様の意志である以上、私たちの側の行いによって消え去ったりはしないのです。必要なことは、イエス様をもっと知ることです。そうすれば不安は消え去り、平安が訪れます。

■どのように前に進むのか

1、罪と重荷を差し出す

「こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。」（ヘブル 12:1）

私たちが前に進めないのは、罪と重荷がからみついているせいです。

重荷とは不安です。あなたの不安をイエス様に差し出して解決しましょう。これまで自分

の力で不安と戦ってきましたが、どんなに頑張っても不安を取り除き切ることはできませんでした。これは、神様に何とかしてもらうしかないことなのです。

また、罪とは人を愛せないことに集約されます。これは、神に無条件で愛されている自分を知ることではいかやせません。むさぼり、見えるものを愛する、人を憎む……、どのような罪も、イエス様が処分してくださいます。恐れずに差し出して、大胆に神に近づきましょう。

不安と罪を神に差し出すことによって、心を前に向けることができるのです。

「ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」（ヘブル 4:16）

2. イエスに目を向ける

「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。」（ヘブル 12:2）

イエス様に目を向けるために、すべてのことを感謝しましょう。腹が立っていると、神に目が向きません。イエス様の十字架に目を向けるなら、すべてのことに感謝できます。感謝できないのは、サタンの罠にはまっている時です。

3. 患難と向き合う

「訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。」（ヘブル 12:7）

神様は、私たちが遭遇する患難を通して、私たちが罪と戦うように訓練なさいます。患難は、神が与えるものではなく、ましてや神の罰ではありませんが、信仰が試されるチャンスです。この時、神は、すぐに助けるのではなく、しばらく静観することによって、心が神に向くように導き、私たちの中から不信仰という罪を排除しようとなさいます。

「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。」
（ヤコブ 1:2-3）

「忍耐」とは、我慢という意味ではなく、「逃げ出さない」ということです。逃げずに問題と向き合い、神を見上げて祈りましょう。まつわりつく罪や不信仰と戦いながら前に進み、神様に近づくなら、必ず平安になります。

「すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。」
（ヘブル 12:11）

救われた人は、全員必ず天国に行きますから、前に進むしか道はありません。この道を進み、神に近づき、神を知るほどに、心は平安になります。神様は、私たちに永遠のいのちと共に、平安を与える計画を持っておられるのです。